

姓名は不明である。蓋し松村の歿後廢役となつたものであらう。

オタチ 御館 能美郡板津郷に屬する部落。山口記慶長五年淺井駿合戦の條に、『稻垣與右衛門共外數軍掛橋口に馳付、島田村・御館村二ヶ所に火を掛燒立る。』と見える。又能美郡名蹟誌に、『この村に錢畠と號し、十間許の地があつて、今に古錢の缺けたのが出るとある。』

オタチ 御館 羽咋郡押水中庄に屬する部落。元祿十四年の郷村名義抄に、『此所城跡屋鋪構之内に昔年村立申に付、御館村と唱申由申傳候。』と記する。

オタチノミヤジンジャ 御館宮神社 能美郡二口(今西二口)に在つた。式内等舊社記に、『御館宮神社。板津郷二口村鎮座。今稱『春日社。舊社也。』とある。能美郡名蹟誌には、『この村の社を御館の宮といひ、附近に流鏑馬の馬場といふが残つてゐると記する。同書にまたこの村に御所の館と稱する地があり。古へ三寶院門跡の住んだ地であるとするのは、御館の宮と關係のあるものであらう。今は二口春日神社と稱する。』

オダノブナガ 織田信長 (一)一向一揆の越前占領―天正元年織田信長の朝倉義景を亡ぼすや、信長は朝倉氏の舊臣桂田播磨守長俊を守護代として一乗谷に置き、一國の政務を掌らしめたが、府中の城主富田彌六郎長秀は二年正月十八日兵を起して長俊の一族を誅したから、信長の北庄に置いた奉行津田九郎次郎・木下助右衛門・明智十兵衛等も亦岐阜に歸つた。然るに國中の土民等長秀に隨ふことを欲せず、金澤御坊の下間筑後頼照・杉浦壹岐玄任・七里三河頼周等の援を得、長秀以下を

倒して圍國を占領したので、越前は全く一揆國となり、頼照は守護代として坂北郡を管し、七里頼周は上七郡を、杉浦玄任は足羽郡を、下間和泉は大野郡を管し、若林長門も亦來つて頼周と共に軍事を管した。八月一揆等更に進んで近江に亂入し、又國境木、目城に下間筑後、鉢伏城に大町専修寺、鷹打嶽に和田本覺寺、湯尾峠に七里頼周の部隊を置いて之を守備せしめた。

(二)信長の越前・加賀侵入―信長は天正三年八月十二日遽然岐阜を發して北陸道に向かうた。加賀・越前の一向一揆之を聞いて、學を堅くし信長軍に當らんとしたが、秀吉の一隊は十五日海を渡つて河野浦に上陸し、新城を攻めて若林長門を敗走せしめ、次いで杉津・木目・鉢伏等の諸壘を陥れ、廿三日本營を府中から一乗谷に移したが、この時柴田勝家以下の先陣は已に加賀に入つたとの報を得た。廿八日信長は豊原寺に入り、先陣は江沼・能美を占領したので、更に北進せんことを請うたが許さず、檜屋・大聖寺二城に戸次右近を置き、加賀の南境を確保するに止めた。蓋し餘りに北進して上杉謙信と衝突するを避けたのであらう。而して信長は九月二日豊原寺を

焚いて北庄に移り、戦後の處置を定め、柴田勝家を北陸の總帥として北庄に置き、佐々成政・前田利家・不破光治をして府中を領して勝家に與力せしめた。

(三)信長の七尾救援―天正五年上杉謙信は七尾城を圍み、閏七月城主山崎春房病歿して危急を感ずるに至つたから、部將長綱連は弟連龍を安土に派して信長に援を乞はしめた。信長乃ち八月八日北進の命を下し、柴田勝家を

主將とし、丹羽長秀・羽柴秀吉・前田利家を之に従はしめ、諸軍加賀に入り、手取川を越えたが、幾くもなく進撃を止め、御幸塚城を修めて佐久間盛政の居館とし、大聖寺城に勝家の部兵を止め、十月三日北庄に凱旋した。これ一は七尾城が既に陥落して出師の目的を失つたのと、一は大和志貴城に據つて反旗を翻した松永久秀を討伐する必要があつたに因る。是に至つて加賀の南二郡は信長の有となり、北二郡は謙信の勢力範圍となつて、その衝突將に目眩の間に迫つたが、六年三月謙信歿して、織田勢は忽ち北陸に横行する自由を得ることになり、七年には佐々成政を越中に入れて富山城に治せしめ、柴田勝家は加賀の一向一揆討伐に従うた。八年閏三月信長と本願寺との媾和成つた。是を以て勝家は信長の命を受けて、加賀の一揆と交渉を開始し、金澤御坊を收めんとしたが、一揆は之に反抗して、勝家を手取川に邀撃した。勝家大に怒り、柴田勝政・佐久間盛政二人を遣はし、加賀の各地を蹂躙せしめた。金澤御坊も亦この時に於いてその攻陥する所となつた。この後勝家は、朝倉氏の遺臣吉田某が、一向一揆の首領岸田常徳と共に、江沼郡山中城に居たのを屠り、十月又柴田勝政等をして、同郡松山に集圍した坪坂新五郎・徳田小次郎等を平げしめ、又自ら粟生の河原に至つて、石川郡松任の若林長門、能美郡別宮城の鈴木出羽の降を容るることを約して誘殺し、九年河北郡森下の龜田小三郎を降伏せしめた。是に至つて信長は諸將を各地に封じ、佐久間盛政に石川・河北二郡を與へて御山に居らしめ、又松任城に徳山五兵衛、小松城には村上頼勝、別宮城に吉

原次郎兵衛、二曲城に毛利九郎兵衛・三戸田久次郎、御幸塚城に徳山少左衛門、寺井三堂山に安井左近、大聖寺城に拜郷五左衛門を置いて土寇の鎮に當てた。この年能登の温井景隆・三宅長盛等勢漸く振はざるを以て、降を信長に請うたが、信長は之を宥し、九年三月菅屋長頼・前田利家・福富行清を遣はして假に能登の州事を管せしめ、八月これを利家の所領たらしめた。十年三月信長は武田勝頼と開戦したが、勝頼は信長が歿したとの虚傳を流布し、越中の一揆を動かして信長の勢力を削かんとした。是に於いて小島六左衛門・唐人式部は一揆に將として神保越中守長住を富山城に圍んだから、織田氏の將柴田勝家・前田利家・佐々成政・佐久間盛政等往いて小島等を平らげた。次いで諸將は、魚津城に居た上杉景勝の黨尻高左京・鐵孫左衛門を攻め、六月三日之を陥落せしめたが、信長はその前日京都に於いて明智光秀の弑するところとなつた。

オタヒデチカ 織田秀親 織田有樂の裔で、信濃守秀一の子。大和柳本一萬石の領主であつた。通稱監物。延寶元年將軍に初見し、貞享四年九月二十七日家督を相続したが、寶永六年二月十六日上野寛永寺の塔頭顯性院に於いて前田利昌の爲に刺殺せられた。

オタマスカタ 織田益方 通稱主税。祖父小八郎信重の祿二千五百石を襲ぎ、天明四年公事場奉行から諸職を經、寛政九年十月若年寄に進み、享和二年六月五百石を加へ、御家老兼若年寄となり、同年十月十一日五十八歳を以て歿した。

オタチ